

2010年3月3日発行

# 江戸遺跡研究会会報

No. 121

江戸遺跡研究会

<http://www.ao.jpn.org/edo/>

例会の日時、会場などの変更があります。ご注意ください。

## 江戸遺跡研究会 第124回例会のご案内

日 時：2010年3月18日（木）19:00～

内 容：小坂井孝修氏（東京都埋蔵文化財センター）  
「新宿区内藤町遺跡－大温室地点の調査－」

会 場：江戸東京博物館 会議室

交 通：J R総武線両国駅西口改札 徒歩3分  
都営地下鉄大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）A4出口 徒歩1分

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室（堀内・成瀬）03-5452-5103

江戸遺跡研究会公式サイト

<http://www.ao.jpn.org/edo/>



◇江戸遺跡研究会第123回例会は、2009年11月11日（水）午後7時より江戸東京博物館学習室2にて◇  
◇行われ、土本 医氏より以下の内容が報告されました。 ◇

## 青山学院構内遺跡第4地点の調査概要 —伊予西条藩松平家の上屋敷—

土本 医

(大成エンジニアリング㈱ 埋蔵文化財調査部)

### 1 はじめに

第4地点の調査は青山学院大学新校舎建設に伴い、予定地内に位置するレンガ建物基礎の発掘調査を主とし、平成19年12月3日～平成20年3月14日、平成20年11月6日～平成21年1月10日、平成21年6月3日～平成21年6月30日の3次に亘って行った。総調査面積は2,830㎡である。現在、平成22年1月（予定）の刊行に向け報告書作成中である。今回の発表は現段階で把握できた調査成果の概要報告である。

### 2 調査区の位置と沿革

遺跡は大名屋敷（渋谷区遺跡番号No.100）として登録されており、その範囲は現在の青山学院構内のほぼ全域に当たる（南に位置する初等部の一部は範囲外）（図1上）。

地理的には赤坂麻布台地の西端の一角、東渋谷丘陵の頂部付近に位置し、現標高は30～34mである。

第4地点は現在の正門からやや西、国道246号に卑近な位置である。対象地は東側が南北に長いテニスコート場で、ここは明治39（1906）年建造のレンガ建物が建っていた場所である。建物は関東大震災で倒壊し、その後は更地となっていた。西側は青山学院がこの地に移転して以来、ほぼ手つかずで残されていた数少ない土地である。現況では樹木の茂る中庭で、良好な遺存状態と思われたが、調査前には樹木の植え替えが行われ、一部攪乱されていた（図1下）。

青山の地は家康が関東入封時に、相模大山街道の「端口しばり」を目的として、この地に配した青山忠成の名に由来すると言われている。そのためか青山は渋谷において比較的早い時期から武家屋敷地化し始め、明暦の大火以後は数多くの大名・旗本屋敷が置かれるようになる。しかし、やはり江戸城に遠く、下屋敷が中心で、上屋敷は伊予西条藩松平家のみである（図2）。

### 3 伊予西条藩松平家

伊予西条藩は、関ヶ原以後、加藤家、蒲生家、一柳家、幕府領と変遷したのち、寛文10（1670）年に松平家が3万石（後に3.3万石）で入封し、幕末までの約200年間にわたり当地を支配する。

西条藩松平家は紀州家徳川頼信の次男、頼純を初代藩主として10代頼英までを数える。青山の地には元禄8（1695）年、長谷川家との相對替により上屋敷を拝領、以後、明治4（1871）年に開拓使の実験農地として収公されるまで在地する。上屋敷に関しては現在調査中であるが、屋敷図や拝領当初の資料を欠き、不明な点が多い。諸向地面取調書によれば敷地面積は4万坪とのことである。

西条松平家屋敷（諸向地面取調書より）

- ・上屋敷 青山百人町下渋谷村 40000坪
- ・拝領下屋敷 上渋谷村 10000坪
- ・根生院領抱屋敷 上渋谷村 下屋敷地続ニ付囲込 1905坪
- ・斎藤嘉兵衛代官所抱屋敷 下渋谷村 上屋敷地続ニ付囲込 4738坪
- ・借地 麻布本村 72坪

## 4 調査概要

### (1) 層序

基本土層の観察は東西南北の4箇所を設置したT. P. で行い、記録していないが、暫時壁面全体も確認するように勤めた。

上記のように調査対象地はテニスコートまた樹木の茂る中庭であり、当初は良好な遺存状態であると見込んでいたが、レンガ建物の整地の痕跡は予測以上に範囲が広く、調査区の全域を覆っていた。また樹木の植え替え時にレンガ建物の基礎を片付けるため、重機で掘り返された箇所も多く、近世に対応する土は上面を大きく削平されていた。

先のレンガ整地層より下部では大きく3枚の地層を確認した。上層は灰色粘質土で、粘土ブロック、炭化物を多量に含んでいる。中層との境は明瞭ではなく、地盤面の整備を行ったようには見られない。この土は19世紀中葉の廃絶と考えられる遺構に顕著で、特に瓦の廃棄層に見られることから建物自体を含んだ廃棄行為との関わりが考えられる。中層は西側の一部でのみ確認した。褐色土・ロームブロックと褐色又は黒色土の互層で下層の盛土整地層である。下層は全域で確認した。黒色土でロームブロックが混ざり、直下のソフトローム漸移層を削平して堆積している。数は少ないが100号のような18世紀以前の廃絶と考える遺構覆土に見られることから近世当初の整地層と思われる。

### (2) 遺構と遺物

検出した遺構は約600基で、その内、近代および近世以前や時期不明の遺構を除く約580基が近世に帰属する。種別ごとでは建物跡、地下室、墓もしくは墓と思われる土坑、土坑、井戸、基溝、植栽痕、柱穴列、ピットのほか、400箇所以上の杭痕も確認できた。

遺物は約17,000点、3,234,000gの遺物が出土した。遺物の主体は瓦で約6,200点、全体の約40%弱を占める。これらは瓦廃棄土坑や大型遺構の廃棄層、さらに瓦を利用した構造物から出土した。また本地点特有の遺物としては石製品？の緑色片岩、いわゆる緑泥片岩がある。これらは厚さ1～3cmの板状に加工されており、121・155号では幅90cm、高さ30cm、重さ10kg以上、174・310号では幅90cm・高さ60cm、重さ20kg以上の長方形に加工された石板（いずれも文字等の彫刻痕はない・穿孔等もない）を意図的に設置している状況も確認した。

また墨書の残る遺物も多く、その中には「中ノ間」・「坊」といった御殿空間の一室を示していると思われるものや「御膳番」・「御右筆」といった役職名の書かれたものもみられる。

### (3) 時期区分

検出した遺構は出土遺物の製作年代また重複関係、覆土の状態から、現状では大きくⅢ期の時期区分を想

定している。各時期の状況は以下のとおりである。

#### ・Ⅰ期（17世紀代）

遺物また覆土の状況から明らかに該当するのは100号（井戸）のみである。100号は調査区東南端部分に位置するがこの地域一体は遺構密度が薄く、重複する遺構はない。直径約1mの円形を呈し、壁面には足掛け跡と思われる横穴を13基確認した。遺物は多くないが、長石釉志野の碗と皿、下総タイプのかわらけ皿、器壁が外傾する内耳丸底の焙烙などが出土している。製作年代から見て廃絶は相対替以前であり、長谷川家に帰属すると考える。

#### ・Ⅱ期（18世紀代～19世紀中葉）

001・018・027（墓もしくは墓と思われる土坑）、092（土坑）、080・174・254（地下室）、450（ごみ穴）号が帰属する。

001号からは、鑑定中であるが、イヌと思われる骨が出土した。構内からは脇差や短刀、煙管、銭貨（新寛永四文銭）などが出土しており埋葬遺構と判断する。また肩甲骨が5本出土していることから少なくとも3体埋葬されており、“共同墓地”的な意味合いが読み取れる。018・027号では骨は出土していないが、位置、構造、また出土遺物に共通性が見られることから同種の遺構と考える。

080・174・254号はロームの天井を持たない地下室で、室部本体には根石を配し、版築により地固めした柱穴がある。また壁面には柱の“あたり”と思われる方形の堀方が見られるなど上屋の存在を指摘しうる構造である。254号には階段部があり、両側縁には瓦と漆喰による雨落溝と思われる施設が付帯する。踏面には中央・両側に杭痕があり、踏面の崩壊防止策が取られていたようである。080号はスロープを有しているが、凹凸が激しく、また杭痕が列状に並んでいる。254号の杭痕からみて、本来は階段であったと思われる。174号は東側に張出部が構築されているが、それを塞ぐ様に緑泥片岩の石板が3枚配置されていた。石板は壁・床に切り込んでいる溝に収まり、東側の床面には石板を支えるためと思われる杭痕が残っていた。これらの状況や石板の重量から、日常的な使用ではなく、廃棄に伴う、なんらかの成果を目的とした行為であると考えられる。

450号はごみ穴で土器、特にかわらけ皿が主体を占める。かわらけ皿は層上部に重なり合っており、煤が付着したものが半数を占めており、いわゆる「かわらけ溜り」とは性格が異なる。

遺物は001・018・027号では製作年代が明らかなものが高田徳利（底部釉拭い取り）と寛永通宝四文銭しかない。080・092・174・254・450号は瀬戸・美濃系の磁器や柿釉の陶器土鍋、鉛透明釉の土器灯明具などが出土しており、Ⅲ期と同じく19世紀中葉の廃絶とも考えられるが、下記するⅢ期にはある特徴があり、上記の遺構にはそれが見られないあるいは少ないことから、消極的ではあるがⅡ期に区分した。

#### ・Ⅲ期（19世紀中葉）

310（地下室）、155（井戸）、121・156・256・430・462～464・482～484（ごみ穴）号などの遺構が帰属する。

310号はロームの壁をはさみ、南北に2つの室を持つ。北側の室には174号と同様に張出部の壁面に溝、床面に溝と杭痕が見られたが、1枚の石板を残し、後は除去されていた。またローム壁の北側には瓦積みによる補強を目的としたと思われる壁が築かれていた。瓦積の壁を除去するとその下から、柱穴が検出されたことから北側の室は本来、ここまでの広さであったと思われる。遺物は19世紀中葉が主体で、揃い・組のものが多く、遺構間での接合も多く、廃絶時期は同時期である。以上の状況から、310号は本来北側の室のみであったものが、廃棄された後、南側に新たに室が構築され、さらに廃棄された北側を改築し、

再利用したという変遷が推測される。

155号は方形の掘方内部に円形の井戸本体が位置する井組のある井戸である。井戸本体には下部に桶状の井側が2段残っていた。また方形の掘方の南北には2か所の張出しがあり、その双方に緑泥片岩の石板が伏せた状態で配置されていた。

121・156・256・430・462～464・482～484号はごみ穴で、いずれも瓦が大量に廃棄されていた。121・156・482～484号は最下層に瓦廃棄層が確認できる。また121号には緑泥片岩の石板が設置されていた。石板は確認面から10cm下の位置にあり、掘り方がないことから、遺構全体を埋める際に設置したと考える。256・430号は層中に廃棄層が確認できる。また430号では土製品の型もしくは類似したものが出土している。462～464号は遺構全体が瓦で埋め尽くされた状態で検出された。遺物の占有率は約半数を占める。また覆土全体も灰色粘質土層で充満していることから瓦の廃棄を主とした土坑と考える。

遺物は圧倒的に瓦が多く、全ての土坑から高い占有率で出土しており、この時期だけで瓦の総点数の60%を占める。各遺構での出土の状況はごみ穴で観察したいずれかのものと一致する。瓦以外の遺物では、磁器では端反碗、松文の浅半球碗を中心に揃い・組のものが多く、陶器では土瓶の出現率が高まるなど各遺構を通し、その傾向は共通する。また墨書・記年銘のある遺物もこの時期にまとまって出土している。

## 5 おわりに

最後に現状での調査の成果をまとめてみたい。まず調査位置と屋敷地の関係であるが、屋敷絵図など詳細な情報がないことから位置を特定することは非常に難しい。現在、道路の幅員の状況と御門の位置を調査中であり、その結果を受けて判断したい。

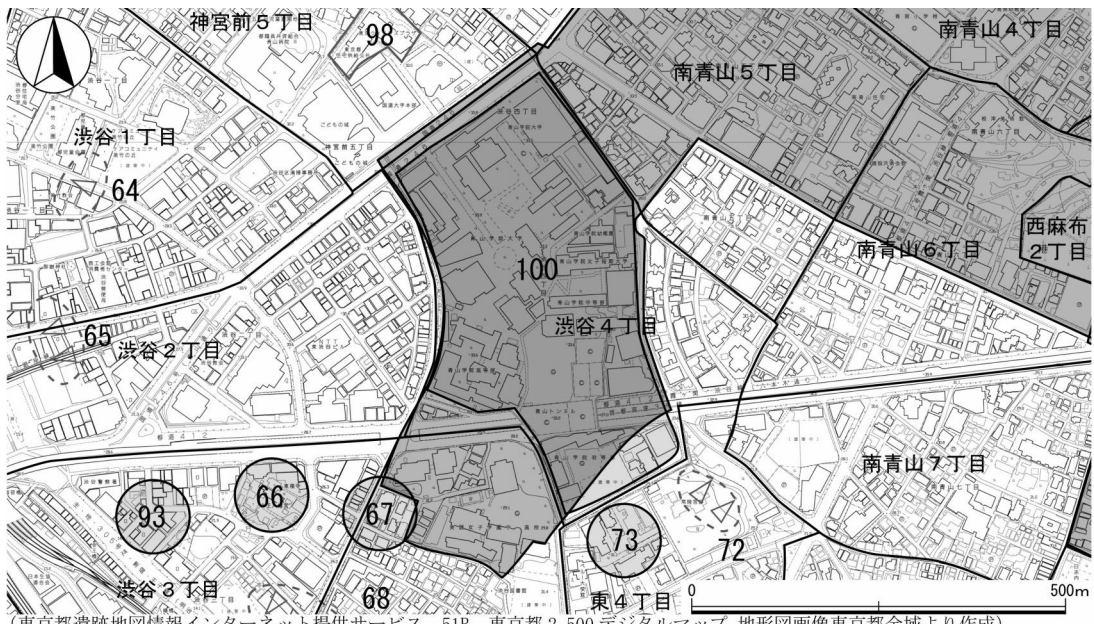
次に土地利用についてであるが、Ⅰ期の遺構は100号のみであり、推測することすら困難である。Ⅱ期以降、松平家の拝領時期については各時期を通じて全体的に遺構密度が低く、しかも井戸・地下室が築かれた空間に建物跡が構築されるといった大きな変化が見られない。Ⅲ期になると、瓦廃棄遺構やごみ穴などが前期の遺構を切るように構築される。遺物では建築部材などは見られないものの瓦といった建物に重要な部材が大量に、しかも比較的遺存状態のよいものが破棄されている。また食膳具をみても端反碗・浅半球碗などの揃い・組のものが廃棄されているなどⅡ期に比べ劇的な変化が見られる。こうした状況は災害あるいは転居といった調査事例に共通して確認できる。

当該期には安政の大地震（安政2（1855）年）や松平家上屋敷周辺を火元とする火事（『見聞雑録』に記述あり、文久2（1861）年）、また収公に伴う転居などが上げられる。現状では災害の痕跡は見られないことから転居に伴う廃棄と考えられるが、今一度、遺物などを再確認するなど裏付けが必要であろう。

以上列記してきたが、現段階ではまだ詳細な検討が行えているとは言いがたく、帰属年代については時期区分において本報告と食い違う部分も多くことはご了承いただけますようお願いいたします。

## 参考文献

- 青山学院構内遺跡調査会 1994 『青山学院構内遺跡』
- 学校法人青山学院 大成エンジニアリング株式会社 2004 『青山学院構内遺跡第2地点』
- 学校法人青山学院 大成エンジニアリング株式会社 2008 『青山学院構内遺跡第3地点』
- 東京都渋谷区 1966 『新修渋谷区史』上巻
- 木村礎ほか編 2002 『藩史大事典』第6巻 中国・四国編



(東京都遺跡地図情報インターネット提供サービス 51R、東京都2,500デジタルマップ 地形図画像東京都全域より作成)

周辺の遺跡 (S=1/10,000)



調査位置図 (S=1/5,000)

(東京都2,500デジタルマップ 地形図画像東京都全域より作成)

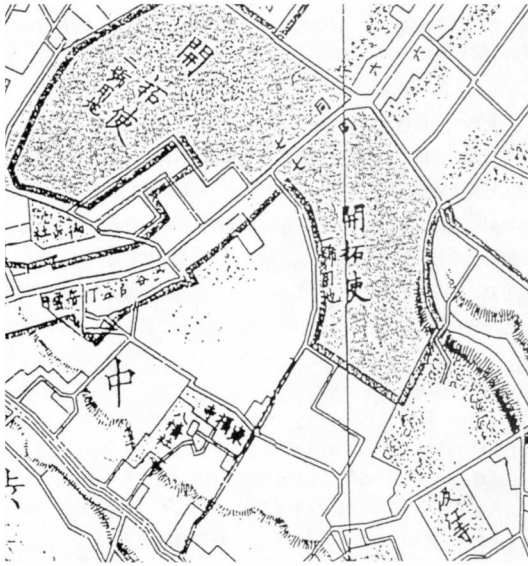
図1



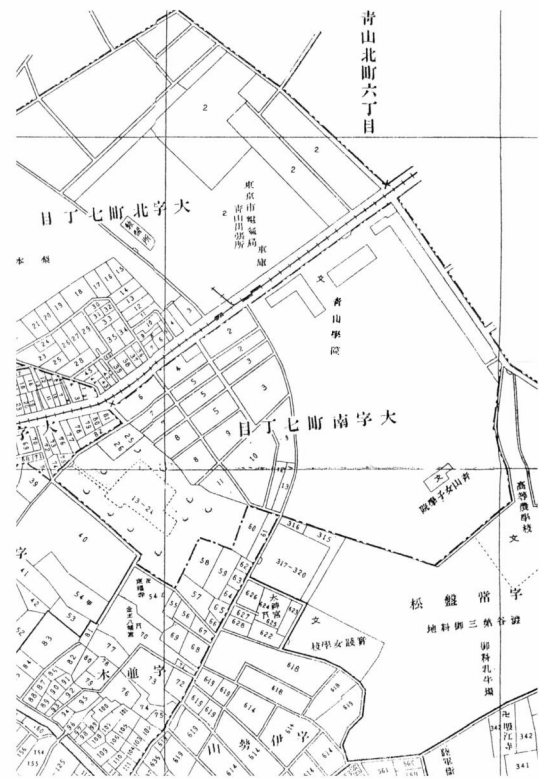
「新板江戸大絵図」寛文10～13年(1670～1673)  
『5千分の1江戸-東京市街地図集成』柏書房 1988年



「東都青山絵図」安政4年(1857)  
『復刻古地図 江戸切絵図』人文社



『実測東京全図』  
明治11年地理局地誌課



番地界入東京全図  
『5千分の1江戸-東京市街地図集成』柏書房 1988年

図2

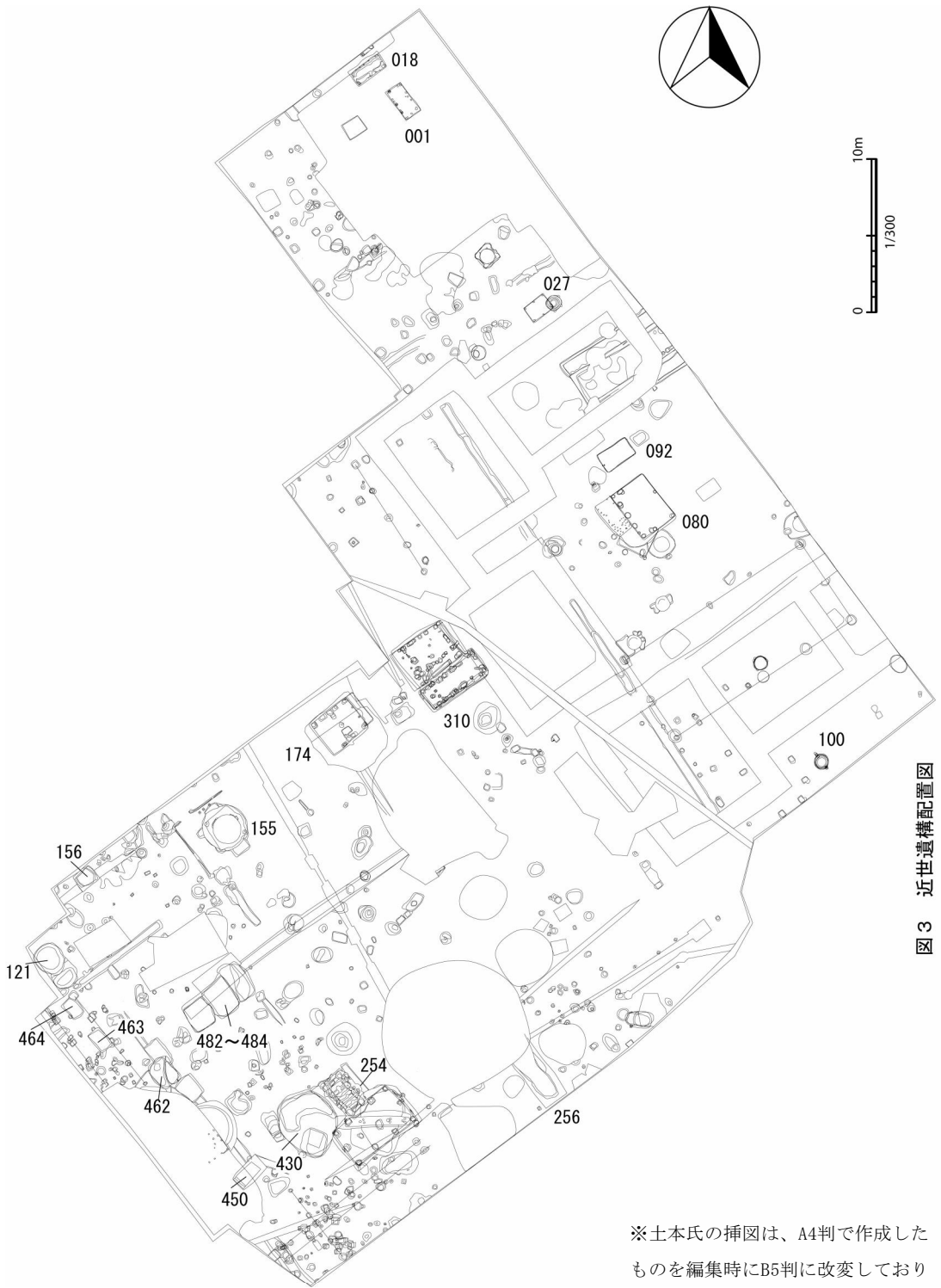


図3 近世遺構配置図

※土本氏の挿図は、A4判で作成したものを編集時にB5判に改変しております。記載されたスケールとは異なりますのでご注意ください。



## 第23回大会「都市江戸のやきもの」を終わって

堀内 秀樹

(当会世話人)

今大会は、江戸東京博物館との共催事業として開催できた。やきものをテーマにした大会として第3回大会「江戸の陶磁器」以来20年ぶりの取り組みであった。江戸遺跡の発掘調査が本格的に開始されてから日が浅い第3回大会「江戸の陶磁器」では、様々な試みが示されたとは言え、基本的な時間軸の設定や空間的な様相などの把握がまだまだ不十分で、暗中模索の状態であったと記憶している。その後、第12回大会「江戸の物流－陶磁器・漆器・瓦から－」では、京焼の廉価品を焼成した生産地信楽と類似した製品を生産した相馬焼を取り上げ、消費地の需要と生産の関係について議論を行った。また、第14回大会「食器にみる江戸の食生活」では、食生活に関連する行為や様相に限定して出土陶磁器分析の方法や実際について考えてみた。

今大会では、基調報告の長佐古要旨にも書かれているように、都市江戸を視座に置いた陶磁器の評価とその延長として江戸とはどのような場所かに対するアプローチを基軸にした。陶磁器の多くは生活道具であり、その時代の生活を反映しているとみることができる。時代性や地域の性格など社会的状況やその変化は、居住する者の生活様式にも大きく影響を与えるはずであり、近世城下町として際立った性格を有する江戸で出土する陶磁器も独自の様相や変化が看取されると考えられる。各報告は、様々な題材を用いて行われたことで、決して判りやすいテーマではなかったと思う。しかし、発表や討論を通じていくつかの重要な点が確認された。その一つは、編年研究を含む個別研究の重要性であった。これらの研究は、今大会のような議論の基礎データとなり、良質のデータによる分析がより大きな成果となって結実されよう。また、様相差をどうとらえるのかと基本的な方法論も、陶磁器の分析、評価をする上で欠落できないプロセスであろう。これらを踏まえ、消費地としての出土遺物の解釈や評価などが議論できたことは、それ自体消費地に軸足を置いて勉強している我々にとって土俵の重要性を再認識する契機ともなった。今後、生産や流通の議論へと発展するにあたって消費地の動態が不可欠な情報となるだろう。

大会当日は、冬寒の中、遠方から多数参加していただき、報告や討論もさることながら懇親会その他で様々な情報交換ができたことは、会にとっても大きな収穫であった。改めて、研究会発足時の目的であった「情報連絡」の大切さを痛感し、今後とも近世考古学、江戸考古学に携わっている方々に参加していただける会にしたい。

最後にはなるが、例年会場を使用させていただき、様々なご支援、ご協力をいただいた江戸東京博物館に深謝したい。

## 江戸遺跡研究会第23回大会「都市江戸のやきもの」参加記

石井 龍太

(東京大学埋蔵文化財調査室)

江戸遺跡研究会第23回大会「都市江戸のやきもの」(主催：江戸遺跡研究会、共催：江戸東京博物館)は、平成22年1月30日(土)、および31日(日)に江戸東京博物館にて開催された。

開会時には場内はほぼ満席で立ち見も出、来場者は年配の方から若手まで幅広い層が見られた。また愛知、石川、鹿児島といった遠方から来た方も少なくなく、本大会の注目の高さを伺わせた。

今回のテーマは「やきもの」である。普遍的な対象だが、意外にもテーマとして取り上げるのは第3回大会の「江戸の陶磁器」以来二回目であり、また20年目ということになる。それ故に、20年経った現在の資料状況、研究状況はどうなっているのかを確認し、今後に繋げていくことを主眼とした発表がなされた。大会冒頭の基調講演の中で、長佐古真也氏(東京都埋蔵文化財センター)は本大会の使命を陶磁器・土器研究に対する現状認識を共有することと位置付け、「江戸」を評価するためのやきもの研究、という今後の方向性を示している。

基調報告を含め、今大会では12本の発表が行われ、さらに3本の紙上発表が要旨集に掲載された。個々の発表内容に逐一触れ、コメントする力を私は持たないが、内容は個別事例を踏まえながら、貿易陶磁、肥前磁器、在地土器、あるいは植木鉢、焼塩壺、箱庭道具といった多種多様な様態の「やきもの」を、ある時は編年研究から、ある時は生産、消費、あるいはその背景にある文化・習俗といった多彩なテーマに基づいて取り上げており、江戸のやきものを多角的に把握しようという大会の主旨に沿ったものであった。また内容の多彩さと共に、発表者も埋蔵文化財行政の関係者から博物館学芸員、大学教員と多彩な顔触れであり、また30代の若手層が発表者に多く見られたのは印象的であった。

一方で、会場からの質問・コメントがやや乏しかったのは残念であった。また発表本数が多かったため一人当たりの発表時間が短いという声も聞かれたが、網羅的な構成を取ったために生じたやむを得ない側面であったと思う。議論を尽くせなかった部分は大会を踏まえて各分野でさらに深められていくべきであり、そうしたあり方は今大会の持つ萌芽性と合致すると言えるだろう。

## 「都市江戸のやきもの」に参加して

吉田 千沙子

(石川県金沢城調査研究所)

江戸遺跡研究会では、1990年に第3回大会『江戸の陶磁器』として、陶磁器をテーマにした大会が行われている。同大会では、陶磁器研究が遺物個々としての認識が中心であった現状から、どういったものがどれだけあるのかといった、組成とその量を把握していくことを目標として掲げられた。それから20年が経過した今大会の目的は、今日までの陶磁器・土器研究の歩みと、研究を進めていくなかで、達成できたこと、課題として残っていることを明らかにし、共通の理解とすることとされた。さらに、「江戸」全体を解説する歴史学へ江戸遺跡研究を発展させいくための可能性を探ることも目的とされた。

2日間の大会では、12本の事例報告が行われ、それぞれの視点を通して、陶磁器・土器がもつ情報から都市江戸における生活様相を読み解こうと試みられた。そのなかで、中野高久氏・梶原勝氏・成瀬晃司氏の事例報告が印象に残っており、その感想を述べていく。

まず、中野氏は、「都市江戸におけるミニチュア箱庭道具の意匠と展開 ―土人形・玩具類の資料化にむけて―」と題し報告された。土人形・玩具類は、陶磁器・土器研究ほど資料化が進んでいないとされ、今回は、玩具類のうち建造物を中心とした箱庭道具を取り上げられ、その資料を収集し、器種分類・時間軸の設定を試みられた。その結果、箱庭道具は、18世紀の前半に器種が増加し、18世紀中頃以降にそれらの器種が広く浸透していくことを明らかにされた。

討論の時に、箱庭道具の器種が増加した18世紀代は、成瀬氏の報告によると肥前磁器の器種も増加しており、そこに生活の変化があったのではといったことが話題にあげられた。こういった生活の変化による出土資料の様相の変化を捉えるためにも、分類そして編年といった基礎的な調査が必要であると思った。

梶原氏は、「近世・江戸における白色系カワラケの消長とその歴史的意義」と題し、報告された。梶原氏は、以前「手づくね型成形カワラケ」の消長について論じられており、今回は、成形技法ではなく色調を第一に考え、白色系と橙色系に分類し、白色系カワラケの消長について次の特徴をあげられた。①白色系カワラケは、1610年代から出土し、1630～40年代以降、減少する。②多量に廃棄されるのは、1630年代頃で終わる。③出土するのは外様大名の屋敷跡に多く、譜代大名や旗本の屋敷跡からは出土しない。これらの特徴から、豊臣から徳川へと政権が交代しても白色系カワラケが残っていたこと、白色系カワラケが減少する1630～40年代は、三代将軍徳川家光の政権時に相当することなどが明らかにされた。白色系カワラケが消えていく要因として、幕藩体制の確立から、武家儀礼において、徳川色をより強く出した形式へと移行した可能性を指摘された。

「手づくね型成形カワラケ」「白色系カワラケ」と聞くと、儀礼的な道具として漠然と捉えていたが、その消長から武家儀礼における豊臣色から徳川色への移行などが読み取れるのではないかという

視点に関心を持った。また、1640年代以降にカワラケの様相が変化するが、陶磁器の様相も同じく変化しており、両者の変化を把握することで、武家儀礼の移り変わりがより具体的になるのではないかと思った。

成瀬氏は、「江戸遺跡出土陶磁器にみる画期と様相差」と題し、『シンポジウム江戸遺跡出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ・Ⅱ』（江戸陶磁土器研究グループ1992、1996）において、江戸遺跡における陶磁器の段階設定を行ってから現在に至るまで、新資料の分析などの増加から、出土陶磁器類の段階設定とその画期の再確認を目的として報告された。

成瀬氏の報告を通して、編年は、新資料が出るたびに改訂して行くことが必要であり、常に詳細な研究を進めていかななくてはならない分野なのだ改めて感じた。成瀬氏が最後に「されど編年」という言葉で報告を締め括られており、当時の生活様相を探っていく際の前提である編年を常に最新の情報を盛り込み進化させていくことが重要だと認識することができた。

この他に報告された内容も多岐にわたり、江戸遺跡における陶磁器・土器研究が着実に歩みを進めていることを実感した。討論では、長佐古真也氏により進行され、報告者がそれぞれの視点からコメントを述べられた。また、報告内容に対する成果と課題についても言及され、陶磁器・土器研究がもつ今後の目標がひとつひとつ明らかにされた。その中で、小林謙一氏が現状の方法論で不足している点について、発掘調査時における遺物の出土状況を、層位や遺構の中での出土の仕方などを含め、きちんと把握していくことが大事になると述べられたことが印象に残っている。陶磁器・土器がもつ情報量は発掘調査時の方法に左右されるのであり、有益な情報を残せるよう考えていかなければならないと思った。

今回の大会を通して、江戸遺跡における陶磁器・土器研究を進めていくなかで、どこまで達成して何が課題として残っているのかを研究者の間で共通の認識として持つことが必要だと感じた。また、10年あるいは20年が経過した時に、陶磁器・土器をテーマにした研究大会がひらかれることを希望したい。